

東南アジア史学会会報 № 12

昭和 45 年 5 月 31 日

研究会報告

昨年 6 月 9 日の河部利夫氏「華僑問題について」を最後として、研究会は会場難その他の事情により、暫くの間中断していたが、第 7 回大会のあとの会員総会において、会員の間から要望があつたので、この度再開の運びとなった。

その第 1 回は 2 月 13 日午後 5 時から上智大学上智会館において開かれ、白鳥芳郎氏の西北タイ山地民族調査についての報告があったが、当日は来る第 8 回大会（昭和 45 年 7 月 4 日、5 日、別紙参照）のシンポジウムのテーマについての相談会をかねたために、報告のための時間は十分とは言えず、誠に残念であった。しかし、その短い発表の間にも、これらの種族の風俗習慣や、とくに山間簿についての指摘は出席者に深い印象を与えた。この成果はその後に到着した数多くの資料を整理した上で、第 7 回大会の第 1 日に改めて発表される予定で、大いに期待される。

その後、研究会は必ずしも定期的と言うことにとらわれず、会員諸氏の帰国や外国人学者の来日の機会に応じて開くこととなり、5 月 22 日午後 5 時から、慶應大学第 1 会議室において、市川健二郎氏が「タイの近代化と歴史研究」について報告された。氏は外務省寄贈日本研究講座の主任教授として、バンコックのチュラロンコーン大学及びタマサート大学において、昭和 44 年 4 月から 1 年間、日本史の講義を行われた。

< 発表要旨 >

タイの近代化と歴史研究

市 川 健二郎

外資導入による急速な工業化に伴い、タイ国は急激な社会変貌をとげつつある。外国経済支配への警戒心、片貿易の恐怖、経済自立の夢等の外政問題は人口増加、技術・教育の向上、地方の生活格差等の内政問題と密接な関連を持つ。国内の反政府活動は共産主義運動という政府側解釈に加え、地方住民の中央と地方の政府に対する批判力増大と地域格差は正気運の高揚と見ることもできる。それは農村の都市への挑戦ともいえる。

急激な社会変動が生み出した重要問題のひとつは世代の断層である。新らしい経済社会環境に順

応しようとする若い世代は家庭、学校、政治へとその断絶を拡大している。筆者が本年4月まで在任したチュラロンコン、タマサート両大学でも学生の社会革新の動きはますます高まりつつある。大学の講義の中には国王の偉業を称える国史のように寺院教育の伝統を継ぐ講義がある。三時間に及ぶその期末試験で学生は全内容を棒暗記して記述する。他方、欧米人と日本人の客員教官の中には比較政治社会史に講義の重点を置く人々がいる。学生が両者を比較し、批判することは当然であろう。欧米教育を受けた若いタイ人教官達はその間にあって二面性を使分ける行動様式を身につけるようになる。

人文科学系学部に関する限り、学部長の他に主任級の少数の教授、助教授がいるが、大部分の教官は専任講師である。一般に彼等は他学部の一般教育科目を兼担し、週18-20時間講義する。事務経費を除く教官研究費はない。また彼等の昇格には研究業績よりも教育者としての評判が役立つ。これらの要素は大学が研究よりも教育機関に重点を置いていることを示している。

学会の歴史研究活動も貧弱である。Siam Societyは毎週木曜夜に例会を開くが、発表者は在留欧米科学者、外交官、財界人が多く、聴衆も欧米人が大部分である。チュラロンコン大学のアジア研究所は月例研究会でかなり活発な討論を展開しており、その年報には政治、社会関係の学術論文が載っているが、歴史分野をふくまない。文学部には地歴学科はあるが研究会はない。学部紀要に教官の論文を載せているが、タイ人の論文は註がないので、筆者の独自の意見はどの部分か明らかでない。その他の出版物では、芸術局調査報告書、史料編さん所紀要等を除けば、学術専門書はまれにしか出版されない。購読層がないためである。

科学的な歴史研究を妨げる他の原因是言論出版統制である。共産主義を非合法とするこの国では思想調査、検閲制度が厳しい。昨年ある外人教官が講義の中で、「仏教は経済発展の阻害要因だ」と述べ、これが問題となって彼は学期半ばに帰国した。現在では沈黙は美德だと心得る教授達が多い。歴史研究の分野は国王の偉業と仏教の世界を称える歴史記述を批判する状況にない。このような環境の中で彼等は自分自身の保身の途を見出している。しかし周囲の社会が変貌し、実社会へ巢立つ若い世代がその批判力を増しつつある時に、彼等は果してどのような反応型、変り身を示すか。この点についてもタイ人歴史家達は微笑しながら何も語ろうとしない。

バリ島のカースト制度など

河 部 利 夫

1月4日の昼下がり、タイ国際航空機はしだいにバリ島のデン・パサール空港におりはじめた。

応しようとする若い世代は家庭、学校、政治へとその断絶を拡大している。筆者が本年4月まで在任したチュラロンコン、タマサート両大学でも学生の社会革新の動きはますます高まりつつある。大学の講義の中には国王の偉業を称える国史のように寺院教育の伝統を継ぐ講義がある。三時間に及ぶその期末試験で学生は全内容を棒暗記して記述する。他方、欧米人と日本人の客員教官の中には比較政治社会史に講義の重点を置く人々がいる。学生が両者を比較し、批判することは当然であろう。欧米教育を受けた若いタイ人教官達はその間にあって二面性を使分ける行動様式を身につけるようになる。

人文科学系学部に関する限り、学部長の他に主任級の少数の教授、助教授がいるが、大部分の教官は専任講師である。一般に彼等は他学部の一般教育科目を兼担し、週18-20時間講義する。事務経費を除く教官研究費はない。また彼等の昇格には研究業績よりも教育者としての評判が役立つ。これらの要素は大学が研究よりも教育機関に重点を置いていることを示している。

学会の歴史研究活動も貧弱である。Siam Societyは毎週木曜夜に例会を開くが、発表者は在留欧米科学者、外交官、財界人が多く、聴衆も欧米人が大部分である。チュラロンコン大学のアジア研究所は月例研究会でかなり活発な討論を展開しており、その年報には政治、社会関係の学術論文が載っているが、歴史分野をふくまない。文学部には地歴学科はあるが研究会はない。学部紀要に教官の論文を載せているが、タイ人の論文は註がないので、筆者の独自の意見はどの部分か明らかでない。その他の出版物では、芸術局調査報告書、史料編さん所紀要等を除けば、学術専門書はまれにしか出版されない。購読層がないためである。

科学的な歴史研究を妨げる他の原因是言論出版統制である。共産主義を非合法とするこの国では思想調査、検閲制度が厳しい。昨年ある外人教官が講義の中で、「仏教は経済発展の阻害要因だ」と述べ、これが問題となって彼は学期半ばに帰国した。現在では沈黙は美德だと心得る教授達が多い。歴史研究の分野は国王の偉業と仏教の世界を称える歴史記述を批判する状況にない。このような環境の中で彼等は自分自身の保身の途を見出している。しかし周囲の社会が変貌し、実社会へ巢立つ若い世代がその批判力を増しつつある時に、彼等は果してどのような反応型、変り身を示すか。この点についてもタイ人歴史家達は微笑しながら何も語ろうとしない。

バリ島のカースト制度など

河 部 利 夫

1月4日の昼下がり、タイ国際航空機はしだいにバリ島のデン・パサール空港におりはじめた。

波頭の白い環にとりまかれた小さな島が紺碧の海の上に浮んでいる。ああ、とうとう着いたかと、これまで何回かの東南アジア旅行のなかで、いつも行きそびれていた、このあこがれの島への第一歩にはひとしおの感慨をおぼえた。

バリ島はこれまで外国人びとから、いろいろな表現でよばれている。「楽園の島」、「熱帯の珠玉」などとたたえられ、1954年ここに遊んだネルーは、バンドン会議の提唱者として、「世界の朝」と感慨をこめて名づけている。また、1966年サヌール海岸に建てられた豪華なパリー・ビーチ・ホテルの開店の時は、「明日の島」と呼ばれインドネシアの未来の発展を祈ったのである。また、古くからサンスクリット語由来のプラウ・デワタ (Pulau Dewata) すなわち「光の島」ともいわれたし、小さな島に約1万に及ぶ寺院(プーラ)が群立している光景から「数多くの寺院の島」とも形容されてもいる。

まさに、空から見ても高層なホテルの窓から見ても鮮烈な光りのなかに輝いているし、ヒンドゥー教と仏教の混交した古いジャワ文化がここに凝縮しているかの如く、全島いたるところに過去の静寂がただよっている。イスラム化し西欧化して現在にいたっているインドネシアのざわめきのなかで、ここのみは棚田の米作で自給自足し、海の幸山の幸で大らかな生活がいとなまれているようだ。

ホテルにおちついて、ロビーに出たとき近づいたボーイに習いおぼえたインドネシア語で、「スマート・スィアン」(今日は)と挨拶した。そのとき、彼がパリーでの独特の挨拶ことばを教えてくれた。すなわち、両手で合掌しながら「スワスティ・アストゥ」というのである。これを聞いて驚いた。タイでの挨拶と全く同じだからである。タイでは、「サワット・ディー」といって合掌(ウワイ)する。この日の午前9時、その挨拶をしながらバンコク郊外のドン・ムアン空港を飛びたった私であった。このひとことで、ヒンドゥー・仏教的パリー文化の本質にふれる思いがした。

そして、この後4日間の滞在は、タイでの経験と理解をよりどころにしながら、十分にバリ島の文化景観や習俗を味得することができたようであった。大小さまざまのプーラ(寺院)、ラーマーヤナ物語に因む古典舞踊、農耕にまつわる土俗舞踊、精霊祠のある風景、村長の家にある木鼓など。稻作文化とアニミズム。それにおいかぶさっているヒンドゥー・仏教文化から、パリーはジャワよりもタイに近いことを痛感するほどであった。

そうした、いろいろの見聞のなかで注意をひかされたのがカースト制度の存在であったのだ。

一人のインフォーマントと話している間にカースト的な制度がまだのこっていることを知った。それを彼はつきの4階級として書いてくれた。(1) Brahmana, (2) Kesatria, (3) Swesa, (4) Isudra,

である。

そして第1階級の Brahmana では、男は Ida Bagus を、女は Ida Aju を姓名の前に付す。第2階級 Kesatria のものは、それぞれ Tjokorda (男), Anak Agung (女) を付し、第3階級 Swesa では Gusti, 第4階級では I(イー)を付している。

例えば、一人のガイドからもらった名刺に I.B. Oka Abianha とあり、木彫店の主人の名刺に I.B. Sukerti とあったが、その I.B. とは Ida Bagus すなわち第1階級 Brahmana の男であることを示すカーストの status title である。そしてまたインフォーマントのいうところによると、上の階級の男が下の階級の女と結婚することはできても、下の階級の男は上位の女と結婚はできないと、このことは現在でも厳しく守られているともいっていた。そして、外国人にはわからないけれども、バリーの土着の人間にとっては、誰がどの階級に属すかはよくわかっているものべた。

ホテルで買った、インドネシア政府情報局のバリ案内 (Department of Information, Bali - Isle of Temples and Dances, 4th ed., 1967) の第3版の序文では、バリの Caste-system の4つの階級というのはただ名称のみが残っていて、現在ではすべてのバリ一人はその天分能力に応じてどんな職業でも選択することができると、説明している。そしてまた、カースト的社会構造はバリーではすでに弛緩しており、社会生活から間もなく消えてしまうであろうとものべている。しかし、この表現のなかには、民主主義を標榜する政府の事実認識に対する戸惑いによる評価があるといいたい。バリーにカースト制が残存することは事実である。

問題はそれがどのように、どの程度にはたらいているかである。帰国後、C. Geertz のバリ一調査に関する論考を読む機会をえた (Clifford Geertz, Person, Time, and Conduct in Bali: An Essay in Cultural Analysis, Yale University, 1966)。その第4章 Balinese Order of Person-Definition のなかの Status Titles の項で、ギーアツもカースト制に関連する title 名をあげている。(Ida Bagus, Gusti, Pasek, Dauh, etc. として)。そのうち筆者の調査とは照合しないタイトルのことはさておいて、「バリーでの status は a Personal Characteristic であって、如何なる structural factors でもない」としている評価は有力な視点ではないかとも思った。

といいうのは、ギーアツはこの島の4つの村の集中調査の結果、32種類のタイトルを見つけ出し、そのうち最多のものは250人、最少は1人が所有していたとのべ、「重要なことは status title は決して集団につけられているのではなく、個人にのみ付けられている」としている (C. Geertz Tihingan: A Balinese Village, Bijdragen tot de taal-, land- en Volkenkunde, 120, 1964)。

これは、あたかも 1932 年立憲革命後廃止された、タイの貴族的官位名（サクディ・ナーニー權威田制に因る）のチャオビヤー、ピヤー、プラ、ルアン、クンなどが現在ではもはや階層的集団帰属の意義を失い、ただ個人的レベルでの權威の残滓を示す程度のものとなっているのに類するものであろう。廃止後は個人の姓名のなかにくみいれ固有名詞化することを許したので、上位のものにはそれを温存しようとしたものが多かった。例えば、Phya Anuman Rajadhon などその典型である。

ともあれ、バリ島の存在は東南アジアのある時期の歴史研究の実証を今日的に把握しうる場として、特異な意義をもっていることが注目されよう。ここには、イスラム化以前のインドネシアが現存している。すなわち、インド化した時代の過去がそのまま続いているところに、大きな歴史的資料としての価値をもつ。ここでは、オランダの植民地主義もそれほど浸透しなかったようだ。史跡として古い習俗の展示館として、むしろ過去を温存するという配慮を感じるほど、人びとの生活、举措がおおらかである。

そして、人びとが、そうした古い文化を維持していることに対する誇りも大きい。本当のインドネシアはバリにあるという自画自讃の声も高かった。それ故、彼らはジャワ島の現状には我慢ができないらしい。イスラム化し、西欧化したジャワ、そこに鋭く異質性を感じているのか、筆者の「外国人」をどう呼ぶかという質問に対し、「オーラン・ジャワ」(Orang Djawa)と書いてくれたインフォーマントの答は大へん興味深かった。しかし、これは必ずしもあたらぬ意識であるともいえる。

というのは、バリ旅行の後ジャワの西部海岸の古都バンテンから、中部・東部への横断旅行を自動車で行ない、ボロブドゥールやプランバナンの遺跡、ジョクジャカルタのサルタン王宮、スラカルタからソロ川にいたる長い旅のなかで、ジャワは依然としてヒンドゥー・仏教的文化が濃厚で、イスラム化の程度は表皮的ではないかとも思った。それは、大陸部、そしてとくにタイを中心としての地域研究の筆者の眼による付会かも知れない。それは歴史的遺産を今日的に考えすぎているのかも知れない。

しかし、過去と現在、ヒンドゥー・仏教文化とイスラム文化、インドネシアの今日をもう一度考えてみたいと思ったのが、今回のインドネシア旅行の結びであるといってよからう。

< 新刊の東南アジア関係書目数種 >

東南アジア研究の急速な発達は研究文献のおびただしい増加となって現われ、ことに最近の業績

これは、あたかも 1932 年立憲革命後廃止された、タイの貴族的官位名（サクディ・ナーニー權威田制に因る）のチャオビヤー、ピヤー、プラ、ルアン、クンなどが現在ではもはや階層的集団帰属の意義を失い、ただ個人的レベルでの權威の残滓を示す程度のものとなっているのに類するものであろう。廃止後は個人の姓名のなかにくみいれ固有名詞化することを許したので、上位のものにはそれを温存しようとしたものが多かった。例えば、Phya Anuman Rajadhon などその典型である。

ともあれ、バリ島の存在は東南アジアのある時期の歴史研究の実証を今日的に把握しうる場として、特異な意義をもっていることが注目されよう。ここには、イスラム化以前のインドネシアが現存している。すなわち、インド化した時代の過去がそのまま続いているところに、大きな歴史的資料としての価値をもつ。ここでは、オランダの植民地主義もそれほど浸透しなかったようだ。史跡として古い習俗の展示館として、むしろ過去を温存するという配慮を感じるほど、人びとの生活、举措がおおらかである。

そして、人びとが、そうした古い文化を維持していることに対する誇りも大きい。本当のインドネシアはバリにあるという自画自讃の声も高かった。それ故、彼らはジャワ島の現状には我慢ができないらしい。イスラム化し、西欧化したジャワ、そこに鋭く異質性を感じているのか、筆者の「外国人」をどう呼ぶかという質問に対し、「オーラン・ジャワ」(Orang Djawa)と書いてくれたインフォーマントの答は大へん興味深かった。しかし、これは必ずしもあたらぬ意識であるともいえる。

というのは、バリ旅行の後ジャワの西部海岸の古都バンテンから、中部・東部への横断旅行を自動車で行ない、ボロブドゥールやプランバナンの遺跡、ジョクジャカルタのサルタン王宮、スラカルタからソロ川にいたる長い旅のなかで、ジャワは依然としてヒンドゥー・仏教的文化が濃厚で、イスラム化の程度は表皮的ではないかとも思った。それは、大陸部、そしてとくにタイを中心としての地域研究の筆者の眼による付会かも知れない。それは歴史的遺産を今日的に考えすぎているのかも知れない。

しかし、過去と現在、ヒンドゥー・仏教文化とイスラム文化、インドネシアの今日をもう一度考えてみたいと思ったのが、今回のインドネシア旅行の結びであるといってよからう。

< 新刊の東南アジア関係書目数種 >

東南アジア研究の急速な発達は研究文献のおびただしい増加となって現われ、ことに最近の業績

を網羅することは、研究者個人はもとより、研究者間の協力を以ってしても不可能に近い。従ってこれからは、書目編纂を専門とする編集者のもとに多数のスタッフが協力することによらなければ研究のための情報入手は望み得ない様に思われる。

- 1962年に出版された 1) Stephen N. Hay & Margaret H. Case, *Southeast Asian History: a Bibliographic Guide*, New York: Praeger, 138 pp. は、大学院学生などの東南アジア研究の指導を目的として、1961年頃までに発表されたモノグラフ及び雑誌論文を、簡潔な解説と共に分類・排列した書目で、大いに研究の役に立ったものだが、これに続く時期の文献を探る手引としては昨年出版された2種の東南アジア関係書目が、極めて重要である。
- 2) Gayle Morrison, Compilier, & Stephen Hay, Editor, *A Guide to Books on Southeast Asian History: 1961-1966*, Bibliography and Reference Series No. 8, Santa Barbara, California: Olio Press, 1969. 105 pp.
- 3) Kennedy G. Tregonning, *Southeast Asia: a Critical Bibliography*, Tucson, Arizona: the University of Arizona Press, 1969. 103 pp.

両者ともほぼ同じ頃に刊行されたものであるが、2)の編者は序文の中での作業に言及していることから見て、3)の方が少し早く出版されたものであろう。2)の編者の1人、Hay は1)の編者の1人でもあり、それと同じ方針で、1961年から66年までのモノグラフを収集したものである。1)に、恐らくは上座部仏教との関連から含まれていたセイロンは2)にも含まれており、ビルマ、カンボジア、セイロン、インドネシア、ラオス、マレーシア及びシンガポール、フィリピン、タイ、ヴェトナム、及び東南アジア全般の10項目に分れ、556点の文献を扱っている。一方、3)の方はセイロンを除く10地域(ヴェトナムを南北に分ける)を扱い、合計2058点を含んでいる。点数から見れば3)の方がはるかに多いし、また単行本のみならず、雑誌論文まで網羅している所は強味であろうが、その点だけで優劣をきめるわけには行かない。2)所載の文献は精選されており、解説もはるかに詳細である。試みにHerbert Feith, *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*, Ithaca: Cornell University Press, 1962. の項を見ると、3)は5行あまりの解説と概評があるにすぎないが、2)の方は23行にわたって、(勿論活字の大きさ等の違いもあるが)内容の紹介のみならず、Hugh Tinker, Robert C. Bone, Frances L. Starnerなど、専門家の批評の重要な部分とその出典が明記してある。その書評の掲載雑誌の数も書目全体では約40点に及び、およそ書目としてこれ程親切なものは他に類を見ない。むしろ利用者としては、これだけの労を取る代りに40点の雑誌その他から関係論文を収録してくれた方がよかつた、と言

う甚だ勝手な注文をつけたくなって来る。そして、そうなると自然 3) の取った方針に近くなつて来る。

検索については 3) は地域内をいくつかのトピックに分け、それぞれの項目の最初に解説を附している。たとえば各国の歴史の項の最初には時代区分の概要が述べられたりして、驚く程有益である。2) の方はこれが代りに、卷末の件名索引がかなりよく出来ていて、ある特定の文献を探す場合には寧ろこの方が便利とも言える。言うまでもなく著者名索引は 2) 3) ともに備わっている。

この両者を見、さらに世界の東南アジア史研究の現状を見て感じることは、書目と言うものの性質が、たとえば Henri Cordier や John F. Embree & Lillian O. Dotson などの、かつての書目に見られる様な、網羅的な完全主義から選択的なものに変りつつあることである。この新しい方向を何と名づけたらよいのか。かりに実用主義ないしは合目的主義と呼んでも可う。ある地域、ある問題について地上に現われたあらゆる文献に目を通すと言うことは不可能もあるし、無意味にもなつた。こんなに我々が網羅的な書目を附けるのは学術論文の末尾だけになつてゐる。そして、我々はその場合むろん解説など附けない。本当に読んだか読まないかが、たちまちばれてしまうからである。Cornell 大学の近代中国史のセミナーで、Knight Biggerstaff 教授は、学生にレポートを書かせる際、「1行でいいから、その文献の寸評を書目に附して書いておいてくれ」と注文されるのが常であった。教授自身の便宜のためか、それとも我々が実際に本を読んだかどうかをチェックするためかと思っていたが、やがてそれは我々自身のためでもあることがよく分つた。研究に関する知識を共有財産と見なす点で、我々はどうしても欧米人、ことにアメリカ人に及ばない様に思う。大学院学生程度の手引書として、こう言う便利なものが出版される、いわば「這えは立て、立てば歩めの親心」を。アメリカ以外の学者達は Spoon-fed Ph.D. などと皮肉るそうだが、アメリカの研究者の数の多さと成長の早さの秘密は、まさしくこの親心にあると言えよう。

インドネシアは東南アジアのうちでも、とくに研究業績の多い地域であるが、オランダのライデンにある Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land- en Volkenkunde (王立言語地理民族学会) は 100 年程に及ぶインドネシア研究の伝統に物を言わせて、インドネシア関係の雑誌論文書目作成に着手し、1970 年 1 月にその成果の一部が初めて公刊された。4) Excerpta Indonesica, 1, Leiden: the Royal Institute of Linguistics and Anthropology, 1970. 79 pp. がそれである。贋写版、紙表紙のこの書目は、前述の 2) 3) に比べるとかなり見劣りするが、それは外見だけに過ぎない。編者 R. S. Karni は、1968 年内に刊行された英文、オランダ文、インドネシ

ア文の定期刊行物約60点を選び、所収論文の数は120に及んでいる。ここでも論文名だけでなく、たった2~3ページの論文についても、数行の解説がついている。但し解説は評価と言うよりは内容紹介的なものであり、すぐれたものの解説ほど長いと言うわけではない。編者のあとがきによると、この書目は王立協会の入手図書を利用しつつ定期的に編纂される由である。対象を英文文献に限っていない点は誠に便利であり、ことにインドネシア文の入手困難な定期刊行物などについての、この上ない手引書ではあるが、編者の大変な労苦と、世界のインドネシア研究者の数（当然東南アジアの研究者の1部分にすぎまい）を思う時、果して永続するだろうかと少し不安になる。最初の1冊を無料で進呈し、「いくら位の値段なら適當と思うか」と言うアンケートを行なうなど、オランダらしからぬナイーヴな商法に直面した時、私は何となく士族の商法を連想したことであった。

この王立協会はこの書目の他に、スイスの Inter Documentation Company と提携して、アメリカの Cornell 大学との間に Joint Microfiche Project を発足させ、本年3月16日から、Cornell 大学中央図書館の Wason Collection のインドネシア関係文献のマイクロフィッシュ化を着々と進めている。全プロジェクトは3年を要し、毎年20,000のフィッシュを作成すると言う大規模な計画で、1945年から68年までの間に西イリヤンを含むインドネシア共和国内で発行された出版物を対象とする由である。現在までにマイクロフィッシュ化されたものは、主としてインドネシア政府中央統計局の統計資料で1949年から60年頃の分である。情報化時代は既に我々の身近に及んで来たことを感じさせる。

(永 積 昭)

< 学会消息 >

松 本 信 広

1. 東南アジア国際雑誌の発刊

ベトナム研究センターが H.B. Jacobini を所長として南イリノイ大学に出来たが、此処から「南東アジア」(Southeast Asia)と呼ばれる季刊雑誌が来年初めから公刊されることとなった。編集者は Wesley Fischel, 副編集者は Nguyen Dinh Hoa, 書評担当者は Hildred Geertz である。各国の専門学者を編集顧問としており、たとえばフランスのコンドミナス、香港の陳荆和氏の名も見える。偏した政治やイデオロギーに關係ないことをうたっているが、恐らく歴史のみならず、政治経済にもわたった広範な専門雑誌となるだろう。

ア文の定期刊行物約60点を選び、所収論文の数は120に及んでいる。ここでも論文名だけでなく、たった2~3ページの論文についても、数行の解説がついている。但し解説は評価と言うよりは内容紹介的なものであり、すぐれたものの解説ほど長いと言うわけではない。編者のあとがきによると、この書目は王立協会の入手図書を利用しつつ定期的に編纂される由である。対象を英文文献に限っていない点は誠に便利であり、ことにインドネシア文の入手困難な定期刊行物などについての、この上ない手引書ではあるが、編者の大変な労苦と、世界のインドネシア研究者の数（当然東南アジアの研究者の1部分にすぎまい）を思う時、果して永続するだろうかと少し不安になる。最初の1冊を無料で進呈し、「いくら位の値段なら適當と思うか」と言うアンケートを行なうなど、オランダらしからぬナイーヴな商法に直面した時、私は何となく士族の商法を連想したことであった。

この王立協会はこの書目の他に、スイスの Inter Documentation Company と提携して、アメリカの Cornell 大学との間に Joint Microfiche Project を発足させ、本年3月16日から、Cornell 大学中央図書館の Wason Collection のインドネシア関係文献のマイクロフィッシュ化を着々と進めている。全プロジェクトは3年を要し、毎年20,000のフィッシュを作成すると言う大規模な計画で、1945年から68年までの間に西イリヤンを含むインドネシア共和国内で発行された出版物を対象とする由である。現在までにマイクロフィッシュ化されたものは、主としてインドネシア政府中央統計局の統計資料で1949年から60年頃の分である。情報化時代は既に我々の身近に及んで来たことを感じさせる。

(永 積 昭)

< 学会消息 >

松 本 信 広

1. 東南アジア国際雑誌の発刊

ベトナム研究センターが H.B. Jacobini を所長として南イリノイ大学に出来たが、此処から「南東アジア」(Southeast Asia)と呼ばれる季刊雑誌が来年初めから公刊されることとなった。編集者は Wesley Fischel, 副編集者は Nguyen Dinh Hoa, 書評担当者は Hildred Geertz である。各国の専門学者を編集顧問としており、たとえばフランスのコンドミナス、香港の陳荆和氏の名も見える。偏した政治やイデオロギーに關係ないことをうたっているが、恐らく歴史のみならず、政治経済にもわたった広範な専門雑誌となるだろう。

2. フィシェル教授の新書

前記雑誌の編集者として活躍する南イリノイ大学教授フィシェル氏はかってゴ・ディン・ディエムの顧問であったが、ベトナム現代政治史の資料集とも言うべき

Vietnam: Anatomy of a Conflict, edited by Wesley R. Fishel (F. E. Peacock)

Itasca, Illinois, 1968.

を著わし、1. 歴史的見通し、2. ジュネーブ後の2つのベトナム、3. ベトナムにおける民族主義と革命、4. ベトナムにおける共産主義と革命、5. ベトナム戦争、軍事面、6. 他方面の戦争、7. ベトナム、合衆国と世界、8. 如何に戦争を終了すべきか、の8節に分ち、当初以来のベトナム問題に関する主として米国の著名な専門家、政治家、歴史家、新聞記者等の論説を集録し、編者の解説を附し、此の悲しむべき民族闘争に如何にアメリカが介入し、泥沼に苦しんだかという経緯を叙述している。現代史の1資料として参考になろう。

3. 東南アジア史の近業

ジョルジュ・セデス氏が東南アジアの印度系国家の歴史の大家であることは云うまでもないが、氏の「インドシナ半島の諸民族」(パリ、1962)は、手頃な一冊としてインドシナの印度系シナ系の文化を受けた諸民族の歴史を太古から現代まで概括して述べたものとして便利である。此書が此度辛島昇、内田晶子、桜井由躬雄の三君により邦訳され、邦人の東南アジア史研究の文献目録、山本達郎教授のセデス氏の業績を述べた一文を添え、「インドシナ文明史」としてみすず書房より公刊されたことは大変悦ばしい。(出版ニュース、45年2月号拙評参照)

また之と並んで河部利夫君により、河出書房「カラー版世界の歴史全25巻」の第18巻として「東南アジア」が発刊されている。大陸と島嶼とを一丸として読みやすく、かつ綺麗な図を沢山挿入した構成は、東南アジアの歴史的鳥瞰を一般民衆にのみこましめるには、多大の成果をもたらすものであろう。著者はあとがきの中に「東南アジア史学会の存在がこのような試みを断行するにあたり、強く心の支えとなつたことを感謝せざるをえない」と述べていられる。

エレン・ジャー・ハマー女史の「インドチャイナ紛争 The Struggle for Indochina」(1954年カリフォルニア)は、日本軍のインドシナ進駐からジュネーブ協定前夜までのベトナム情勢を記録した良著であるが、その邦訳が河合伸氏によってみすず書房から「インドシナ現代史1」として発刊された。「現代史・戦後篇」の第8冊であるが、同叢書は本書をもって一応打切られたことは残念である。なお、その「月報」に松本信広「少数民族の悲劇」が掲載されている。

またレイ・タン・コイ「東南アジア史」(クセジュ文庫)が石沢良昭氏の訳によって白水社から刊行された。手軽な読みやすい小冊子で一般読者に便宜を与えることだろう。

4. 東方学会の国際会議

5月15日に第15回東方学者国際会議が霞山会館で開かれた。従来とちがって発表者多く盛会であったが、32名の発表者の中次のような講演があった。

中世ビルマにおける外交観念と慣行 ジャニス・スタルガルト夫人(オーストラリア)

中世ビルマの碑文には外交使節団に関する章句が多い。パガン時代インド、中国、セイロン、スマトラ、ジャバ、マラヤ半島と外交関係が密接であり、宗教的な事項が多く記載されている。碑文は巴利語、モン語、後にビルマ語で時日、使節団長、訪問先の官廷、訪問の目的、その成果などが丹念に記録されている。

中国に於ける竜船競渡の本質について 劉 枝 萬 (台湾)

競渡は儺祭より派生し、水鬼・疫鬼・水怪の三者を駆逐するのが主目的であり、民間の農耕儀礼ともやゝ習合し、瘟神信仰と農耕儀礼の接点になっているが、その本質はあくまでも、水上に於ける駆邪の行事である。

ベトナムに於ける年間稻作儀礼 グエン・カク・カム(ベトナム)

ベトナムでは動土祭・籍田祭・下田祭・上田祭・迎春祭・舊新祭等の稻作儀礼が毎年行われ、その外にも様々な俗信や慣行が存している。

附記 発表者のスタルガルト夫人はオーストラリア、レバーヒューム交換学徒として来日、東大の山本達郎教授について研究中である。夫君も国際政治学者で慶大訪問教授であり、今度の東方学会でも「東南アジアの現代諸国家における外交観念の基盤」なる講演をされている。

劉枝萬氏は台湾語言研究所々員で我国に長期滞在し民族学を研究され、諸所で講演されている。同氏に左の如き業績がある。

清代台湾之寺廟(台北文献4・5・6期・1962)

台湾之瘟神信仰(台湾省立博物館科学年刊6・1962)

台湾之瘟神廟(中央研究院民族学研究所集刊22期・1966)

台北市松山祈安建醮祭典（全・專刊の 14・1967）

カム氏は東京外国语大学のベトナム語教授で最近左の述作がある。

ベトナム語における古代中国語の影響（第 14 回 東方学者国際会議・1969）

古代ベトナムに於ける中国古典研究（東京外国语大学論集 20・1970）

5. 北タイにおける先史時代遺跡の研究

タイには諸国の考古学者がはいりこみ、まだ戦禍にみまわれない此処女地に調査の鍵をいれてい
るが、タイの鉱山局とドイツの地質調査団とが合同して 1966 年と 1968 年との 2 回北タイで行
った地質調査に際し、新たに 9 箇所の先史遺跡が発見され、その略報告がシアム協会雑誌の 58 卷
第 2 冊（1969）に掲載されている。 K.E.Koch & M. Siebenhuner) Some newly discov-
ered Prehistoric Sites in Northern Thailand.

コッホ、ジーベンヒュネル両氏の調査した遺跡の中 3ヶ所はサルウェン河の附近に位し、遺物はホ
アビン型の打石器で土器を伴わず、中石器時代の半ばに属しているのではないかという。その他 6
ヶ所は北タイの各地に散在し打裂石器を出し、中には有肩石器型のものを探す所もある。

なお東南アジアにおける考古学研究については 1965 年の時点における一括した概述が近森正君
によって日本考古学年報第 18 冊に掲載されている。即ちベトナム関係ではソ連の Boriskovsky の
ヌイ・ドにおける下部旧石器時代遺跡の調査（1960），キンバン貝塚、その他の遺跡の研究。カン
ボジア関係ではグロリエ氏のアンコール・トムの中国陶器の資料にもとづく編年の確立、サンボー
ル、ブレイクックの発掘、 E. Saurin によるクラチエ、ストゥントゥレンにおける下部旧石器の調査。
タイ関係ではタイ、デンマークの合同調査によるカンチャナブリの諸遺跡研究、ソールハイムを中心とするハワイ大学の東北部におけるドバラバティやクメル時代の調査、大英博物館の Sieveking
による北部タイ、オーストラリアの Loofs 仏のボアスリとによる中部タイの調査、フィリピン関係
ではマニラ国立博物館のロバート・フォックスによるフィリピンのパラワン島洞穴調査、マレーシ
アではハリソン等によるサラワック、サバの諸調査、マラヤにおける 1964, 1965 年における銅
鼓の発見等があげられている。

6. コーネル大学東南アジア研究計画

1950 年以来東南アの地域研究に努力しているコーネル大学は、その成果を多くの刊行物によっ

て示しているが、最近左の資料を出版した。

Akin Rabibhadana, The Organization of Thai Society in the early Bangkok Period,
1782-1873, Tuly, 1969.

Ernest E. Heimbach, White Meo-English
Dictionary, August, 1969.

7. 陳育崧氏の来日

シンガポールの南洋学会の副会長である陳育崧氏が万博見物の為来日し、A・A研、東洋文庫等を歴訪し、慶大で3月25日、陳荆和氏の通訳で東洋史関係教員と対談した。時間の余裕がなく、東南アジア史学会の会員諸君を対象とする催しが出来なかったのは残念である。氏は明代の華僑がまず東南アジアのイスラム化に貢献した事実を、スマトラの旧港宣慰使施進卿の娘施大娘仔俾那智の名を琉球の歴代宝案やラッフルズのジャバ史などから復原し、その娘がグレイシクにあって回教の使徒ラーデン・パクのやしない親となったと云われていることなどから立証し、1960年第1回東南アジア歴史学者会議で発表している。華僑史の研究の推進にこれからも同氏の活躍が期待されている。

8. 台湾に於ける先土器文化の発見

1968年から1969年にかけ 台湾の東海岸浜郷の洞窟から日本で普通「プレ・縄文」と呼ばれる原始的な打製石器が発見され、発見者宋文薰氏による報告が中国民族学通訊第9期(1969)に発表されているが、国分直一教授は、立教大学の物質文化研究会刊行、「貝塚」4号(1970・1)に「台湾東海岸における先陶文化の発見について」という一文に於て之を紹介し、我国の発見と比較して適切な助言をされている。

なお 1967年11月刊、国立台湾大学考古人類学刊、第29・30期合刊に日本人の台湾土著民に関する文献の総目録、即ち「日文書刊所載有關台灣土著論文目録」(一)が掲載されている。吉原彌生といふ邦人が編纂した旨陳奇祿氏が添書している。

9. ベトナム古代史に関する論争

藤原利一郎氏の「古代文化」掲載の論文がシンガポールの「東南亞研究」第3巻1967に「安陽王与西囉」として訳載されたが、之に対してシンガポール大学中文系主任教授饒宗頤氏が「安陽王

と日南伝に就いて」という一文を「史学」第42巻第3号に寄せられ、之に対する異論を提起された。なほ之に就いて陳荆和氏も「安陽王の出自について」という論文を全じく「史学」第42巻4号に発表されている。

饒宗頤氏は香港大学から最近シンガポール大学に転ぜられたので同氏の知友が「饒宗頤教授南遊贈別論文集」(1970)を刊行している。

お 知 ら せ

会員萩原弘明氏より東南アジア史学会への御要望がありましたので、お伝えいたします。

鹿児島大学教養部史学研究室では、1968年以来、歴史学研究のための雑誌「史録」を発刊し、現在までに2号が刊行されています。東南アジア史についての投稿を歓迎するとのことです。詳細は鹿児島市鴨池町201 鹿児島大学教養部史学教室にお問い合わせ下さい。

また、河部利夫氏は昨年12月28日から本年1月27日にかけて、東南アジア各地を視察され、とくにバリ島の文化に関心を示されました。タイ語とバリ語とのあいさつの仕方の類似など、日頃東南アジアを専攻する我々にとって、極めて多くの示唆に富んでいたので、誌上の研究会として、とくに執筆をお願いしました。

(永 積 記)

編 集 後 記

なるべく頻繁に会報を出してほしいと言う会員の皆さんからの御要望と、先立つもののこともあるので適当に願いたいと言う委員側からの希望の中間を取って、年3回会報を発行する計画である。今回は夏季大会の通知をかねるため、少なからずあわただしい編集ぶりとなつたが、松本会長、市川健二郎氏、河部利夫氏より興味深い原稿を頂くことが出来たのは嬉しい。

日本の雨期が近づくにつけても、インドシナ全域に拡大するおそれのある戦雲は、まことに憂慮に堪えないものがある。1日も早く平和の回復することを祈ってやまない。

(永 積 昭)